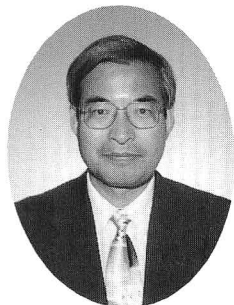


# 日本光学会 平成 11 年度年次報告

## 1. 総 括

日本光学会前幹事長 山口 一郎



### (1) 活動方針と出版

日本光学会の本年4月末現在の会員数はA会員809名、B会員1,175名、特別会員174口となっている。昨年度も光に関連する科学と工学の進展と啓蒙とを中心に据えて、以下の活動を行った。

出版では機関誌「光学」を月刊、英文論文誌OPTICAL REVIEWを隔月刊でそれぞれ発行した。後者はJapanese Journal of Applied Physics (JJAP), Journal of Physical Society of Japan (JSPJ), Progress of Theoretical Physics (PTP) とともに物理系学術誌刊行協会(2000年4月設立)に参加することになった。電子出版の確立を目指して各誌が協力し合い、それを足場として、アメリカ、ヨーロッパそれぞれでの物理系学術誌の協力体制に対抗できる第三極の形成を目指す。OPTICAL REVIEWが日本はもとよりアジア・太平洋からの光分野の論文を集約する雑誌へと発展することを希望している。

日本光学会の現在の財政状況は非常に健全である。これは歴代幹事の努力の賜物であり、その一部を会員へのサービスに還元するため、8年ぶりに会員名簿を刊行した。電子メールアドレスや所属研究グループを新たに加え、巻末には過去の活動状況や受賞者の一覧表、研究グループの紹介などを掲載し、会の活動の便覧としても活用できるようにした。

### (2) 講演会と講習会

会議ではまずSPIEとの協定(1997年締結)にもとづく1st OSJ-SPIE Joint ConferenceとしてInternational Conference on Optical Engineering for Sensing and Nanotechnology (ICOSN '99)を、6月16~18日にパシフィコ横浜で開催した。参加者は17か国から194名であった。発表は2セッション並行で行われた口頭が82件、毎日開かれたポスターが41件の合計123件であった。論文集SPIE Proceedings Vol. 3740 (684ページ, 146論文)

が会議当日に参加者に配布された。光学測定機工業会が例年開催している光ナノテクフェアと同時に開催し、特別展示ブースの提供などの援助を受けた。

光学素子の設計・製作・評価に関する発表を中心とする光学シンポジウム(第24回)は7月1,2日(木,金)に東大生研で開催され、演題28件、参加者305名が集まった。特別セッションとして企画されたフォトニック結晶の光学特性と応用および光ディスクと画像表示がとくに注目された。

第33回サマーセミナーを9月16~18日に「新しい視覚と画像の世界」の題で長野県軽井沢町の上智大学セミナーハウスで開催した。光結像の基礎、視覚、すばる望遠鏡の光学系、超音波の可視化、ナノフォトニクス、高性能ビジョン、液晶表示素子と多彩な話題が取り上げられた。新しい試みとして第2日の晩に有志のご協力を得て光学実験のデモを行った。聴講者は42名で、学生がその3分2を占めた。今後も光学への啓蒙の機会としての役割を打ち出していきたい。

光に関連する発表を内外から広く集めようとの趣旨で1992年に始められ、いまや日本光学会の年次講演会として確立した感のあるOptics Japan '99は11月23~25日に阪大で開催された。演題209件、参加者480名は前年からそれぞれ1割、および2割の増加である。今回初めて3日間となり、応用物理学会とも離して開催した。口頭講演は招待およびシンポジウムに限り、一般講演はすべてポスターとした。招待講演には光学会の外に呼びかけることを考え、フィリピン、分光学会・レーザー学会から一人ずつお願いした。光学会の最新トピックにも招待講演を企画し、応用物理学会とは異なるスコープを明確に主張するようにした。

テーマを絞って勉強する機会を目指す第26回冬季講習会は、「超短パルス光学」と題して2000年1月17,18日に東大生研で開催され90名の参加があった。フェムト秒パルスの発生と応用を中心に基礎から最近の成果まで幅広くていねいに講義され、好評を得た。

このほかに光学五学会関西支部連合講演会(7/15,大阪)、カラーフォーラムJapan '99(11/9~11,東京)、関西講演会(12/9,徳島)、名古屋講演会(12/10,名古屋)を開催した。

### (3) 会員の表彰

平成11年度光学奨励賞（「光学」、OPTICAL REVIEWに掲載された論文の30歳未満の著者が対象）が、干渉計により2パルス励起過程を解析した藤貴夫（東大理）と3次元空間の明るさの認識を研究した溝上陽子（立命館大理工）にOptics Japan '99の会場で授けられた。また40歳までの会員を対象とする平成11年度光学論文賞（第41回）は、本年3月の春季応用物理学会（青山学院大）の日本光学会総会の席上で、市村厚一（東芝）が固体における光誘起透明化効果の実証に対して、小野寺理文（能開大）が半導体レーザーの電流変調による多波長干渉計の研究に対してそれぞれ授与された。

会員の発意で作られた研究グループでは、位相共役・光波ミキシング、イメージサイエンス、近接場光学、コンテナポラリーオプティクス、視覚、光コンピューティング、光設計、微小光学、ホログラフィックディスプレイに加えてあらたに生体医用光学研究グループが設立された。それぞれ研究討論会や機関誌の発行、Optics Japan '99での特別セッションや応用物理学会講演会でのインフォーマルミーティングを企画した。

### (4) 国際協力

昨年7月にSPIEとの協力協定を更新した。7月にデンバーで開催されたSPIE年会におけるアジア代表者会議に出席した。来年6月6～8日に第2回OSJ-SPIE合同会議としてICOSN 2001をパシフィコ横浜で昨年とほぼ同じ形式で開催することが決定し、準備が開始された。新たな試みとして11日に関西でサテライト会議を開催することになっている。幹事長は2月14～16日に、中国光学会、SPIE両会長とともに韓国光学会の創立10周年記念講演会に招待され、日本光学会の活動状況を紹介した。近隣諸国との交流もさらに考慮する必要がある。

### (5) 本年度の活動計画

第25回光学シンポジウムは6月22、23日に東大生研で、サマーセミナーは8月24～26日に軽井沢で、またOptics Japan 2000は10月7～9日に北見工大で開催される。これは9月初めに札幌で開催される応用物理学会と分離されている。光設計研究グループでは11月15～17日に2nd International Conference on Optical Design and Fabricationを東京で開催予定である。良好な財政状況を光学会の一層の発展の礎石とするために、光学会の資料室（52 m<sup>2</sup>）を応用物理学会の事務局の近くに開設した。過去の幹事会資料の一括保管、20名程度の会議の開催、「光学」およびOPTICAL REVIEWのバックナンバーをはじめとする内外の光学関係の図書の収集と保管などに利用す

ることを考えている。また地方講演会として新たに北陸信越講演会が10月末に新潟大学で開催される予定である。

昨年はOSAとSPIEの合同が広く議論され、会員投票の結果、僅差で否決されたが、両学会の間の協力は強化されることになっている。日本においても光科学および光工学の幅の広さと社会の関心と期待の大きさを鑑み、光学会から世界に通用する独創的な成果を生みだすとともに、それらを引っ提げて外国を含む関連他学会に協力と連携を呼びかけて研究と技術開発の展望を一層広げていきたい。

## 2. 編集

### 「光 学」

前編集委員長 志村 努

「光学」の編集・出版作業は、伊東前委員長時代からの改革が一段落し、安定な軌道に乗ってきた。むろん各号ごとの小さな問題の発生は皆無ではないが、各編集委員や編集局のご努力でとりあえずは無事乗り切っている。編集委員会も出席率は非常に高く、特集の企画や編集プロセス等に関する活発な議論が行われており、誌面にもその成果が現れているように思われる。

原著論文（研究、研究速報、技術報告）の掲載数は1995年からの5年間で順に、31、33、22、25、15となっており、それ以前からみても長期減少傾向にあり1999年度はついに20編を割ってしまった。日本語の原著論文のニーズがもはやなくなってきたのではという心配も起こったが、「光学」およびOPTICAL REVIEWの編集委員やその他の方の意見では日本語の原著論文誌不要論は出なかった。特に初めて論文を書く学生にとっては、言葉の問題から解放されて論文の書き方のよい訓練になる、という意見が多かった。実際29巻（2000年）の1号から5号までにすでに13編掲載されており、28巻は例外的に少なかったということになりそうである。

原著論文に関しては編集委員会で査読プロセスの改革に取り組んでいる。分野別に複数のエディターを置くトピカルエディター制は伊東前委員長の代から始まったが、これを押し進めた形で論文の掲載の可否の判断の際のエディターの権限を強化する方向での新しい査読プロセスが間もなくスタートする予定である。特に、査読者と著者のやりとりの回数を減らし、投稿から採否決定までの日数を減らすのがねらいである。現在でも投稿から出版までの平均月数は5か月強であり、一層の短縮化を期待したい。

ここ何年か解説記事にカラーの図表や写真を載せたいという著者の希望が増えつつある。編集委員会では記事のわかりやすさ・魅力を増すという点でカラー化は有効であると考えているが、印刷費用の増加との折り合いが問題である。28巻では5号で本文記事とホームページの連携によるマルチメディア化の試みを行った。これは担当編集委員と著者の方々の多大な労力によって実現したものである。また10号、11号では目次の次のページに複数の著者のカラー図表をまとめて掲載するという方法をとった。幸い幹事会で29巻に関して各号1~2ページ分のカラー化予算をつけていただいたので、今年度は積極活用がはかれると思う。同時に解説記事の著者の方への周知も必要となろう。また誌面の多色化も今後の検討課題であろう。

「光学」は解説誌、原著論文誌、日本光学会の広報誌、等を兼ねているという点で、有利さ・難しさの両面をもっている。これらのバランスをいかにうまく取って魅力的な誌面にしていくかが、継続的な課題となろう。世の流れに従えば原著論文のPDF化も不可欠であろうし、また日本語の原著論文を英語の論文からreferしやすくする工夫も必要であろう。以上全般にわたって編集委員会あてにご意見をいただくと幸いである。

## 「OPTICAL REVIEW」

前編集委員長 朝倉 利光

1999年はOPTICAL REVIEW 発刊6年目であるが、Vol. 1が京都で行われた国際光学委員会研究集会の特集号として1994年末に発行されているので、実質的には創刊から5年経過した年に当たる。5年の経過の結果として、論文投稿から本誌発行に至る過程においてOPTICAL REVIEWは順調に発展して安定状態にきている。このことは、本誌の目的である国際性(英文出版)、高いレベルの論文の掲載、サーキュレーションのよさ、迅速な査読と発行などが達成されつつあり、国際的な学術誌として認識されつつあることを意味していると思われる。このような成果は、本誌の発行に尽力されてきた方々によるところ大であり、ここに改めて感謝の意を表したい。

1999年度の投稿数は99編、掲載論文数は92編であった。前年度に比較して、投稿数で8編、掲載論文数で21編の増加であり、このことから本誌の発展を伺い知ることができる。本年度の掲載論文の特徴は、regular paperとletterの増加と合わせて、review paper 5編が掲載されたことであろう。review paperの内容は光学分野で多岐にわたっており、これらの論文を通してOPTICAL

REVIEWのカバーする領域の広さを知っていただけるものと期待している。論文投稿者は、日本光学会会員が約74%で、前年度の80%から減少してきており、会員以外からの投稿が増加しつつある。また、本誌への海外からの投稿者も増加傾向にある。これらは本誌が幅広く認識されつつある証拠でもあり、歓迎すべきことであろう。

分野別投稿の内訳は、多い順にPhotonics and Optoelectronics (23編)、General and Physical Optics, Information Optics, Lasers, Optical Systems and Technologies (各12編)、Nonlinear Optics, Environmental, Biological and Space Optics (各9編)、Visioin (4編)、Quantum Optics and Spectroscopy (3編)、Far Infrared and Short Wavelength Optics (2編)、Optical Materials and Manufacturing Technologies (1編)であった。投稿論文が、前年度まではあるいくつかの分野に集まる傾向があったが、上記からわかるように各分野に広く平均化してきており、本誌があらゆる分野の対象となっていることが知れる。

将来へのOPTICAL REVIEW 発展の目標に、毎月刊行がある。現在の年間投稿数が100編前後であり、隔月刊行では問題がないが、毎月刊行には少なくとも年間150編位は必要であろう。今後の投稿者数の増加に期待するとともに、より一層の投稿勧誘への努力が求められる。投稿勧誘には、本誌の宣伝活動が基本となる。現在、宣伝活動としてインターネットにホームページを開設し、各号の内容とアブストラクトを掲載している。また、2000年度からは、学会誌「応用物理」に本誌の目次が掲載されることになっており、応用物理学会会員により広く本誌の存在が認識されることであろう。

世界の学術誌の電子化出版への流れを受けて、応用物理学会と日本物理学会は論文誌刊行組織として「物理系学術誌刊行協会」を発足させ、2000年4月から活動することになった。その対象となる学術論文誌としてOPTICAL REVIEWも入っており、将来の本誌の出版はこの刊行協会の傘下で行われるであろう。2000年4月から本誌の編集委員の一部交代が行われる。編集委員長に岡芳樹氏(奈良高専)、出版委員長に山口一郎氏(理研)が着任し、両氏は本誌を代表して刊行協会の役員として参加する。

今後はOPTICAL REVIEWがより多角的に検討され、国内外の多くの研究者の協力を得て、日本発の国際学術誌としての位置を確立されることを期待している。

### 3. 研究グループの活動

#### (1) 位相共役・光波ミキシング研究グループ (Topical Group on Phase Conjugation and Wave mixing)

位相共役・光波ミキシング関係の研究が光学の各応用分野への展開をみせ、応物学会や Optics Japan での発表が、多くの分科に分散しつつある現状で、新たな研究グループへの展開をはかるための準備活動を行った。今年度は研究会は行わず、今後の研究グループのあり方に関する検討会(非公開)を開催した。

#### (2) イメージサイエンス研究グループ (Image Science Group)

- Optics Japan '99 提案セッション「時間空間発展する波動場の像形成」の開催(招待講演4件+一般講演19件)。
- ISG news letter 25 の発行。
- インターネット上での ISG FORUM による討論, 情報交換。
- 春季・秋季インフォーマルミーティングの開催。
- 会員数 182 名。

#### (3) 近接場光学研究グループ (Near Field Optics Group)

スタンフォード大 G. Kino 教授の講演会(6月, 演題: Solid immersion lens and its application, 神奈川サイエンスパーク)を開催した。参加者は48名で、光記録への応用可能性から、企業の方々の興味が集まり、熱心な質疑応答が行われた。また、第8回研究討論会を開催した。(6月, 神奈川サイエンスパーク)。参加者は54名、発表件数16件であり前回までと同様の盛況であった。なお、すぐれた発表に対し授与する近接場光学賞については2件が受賞した。近接場光学研究グループの幹事が発起人となって設立されたアジアパシフィック近接場光学ワークショップの第2回目が中国北京市で開催され(12月)、幹事がその運営を援助した。参加者数100名、発表件数82件で、第1回目(平成8年, ソウル市)に比べ格段の規模増大、活性化がみられた。第3回トピカルミーティング(12月, 主題「近接場光による物質の状態制御と加工」, 河口湖)を2泊3日で行った。参加者は17名であった。参加者が少ないのは、集中討論するために参加登録者数を制限したためである。少数参加者により、きわめて密度の濃い自由討論ができた。参加者からも非常に有意義であったとの感想が寄せられた。

#### (4) コンテンポラリーオプティクス研究グループ (Contemporary Optics Group)

平成11年3月5日東工大長津田キャンパスにて、第9回研究会をホログラフィックディスプレイ研究会との共催により開催した。テーマは「ホログラフィーの新展開に向けて」、プログラムは以下の通りであった。1. 「光誘導異方性媒質への偏光ホログラム記録特性」(電通大 岡田佳子), 2. 「量産型フルカラーリップマンホログラム」(大日本印刷 高林会美), 3. 「ホログラフィックディスプレイと超多眼ディスプレイ」(千葉大 本田捷夫), 4. 「リアルタイム・インテグラルフォトグラフィー」(NHK 放送技研 岡野文男), 5. 「アートホログラフィー・応用編・活動報告」(石井勢津子), 参加者約20名。随時メーリングリストを用い研究会ニュース, 就職・ポスドク情報などの情報交換を行い, 会員相互の連帯を図っている。現在の会員数は133名(内学生会員26名)である。

#### (5) 視覚研究グループ (Vision Research Group)

応用物理学会講演会, Optics Japan の発表についてのテクニカルミーティングである3回の研究討論会, 国外の研究者による特別講演会を1回を開催した。いずれも参加者は30~45名程度であり, これらの会の目的である十分な議論に適しており成果があった。また, Optics Japan '99 のシンポジウムを行ったため, 平成11年度は国内研究者の企画講演会を見送った。

#### (6) 生体医用光学研究グループ (Biomedical Optics Research Group)

平成11年4月に発足。略称BOG。積極的に参加を希望する研究者は40名余り。11月のOptics Japan '99でのシンポジウムは発表件数12件, 延べ参加者約80名で盛況。BOGと呼応して, 今春の応物講演会でも3. 光分科で新たに生体・医用光学のセッションがスタートする。

#### (7) 光コンピューティング研究グループ (Group of Optical Computing)

光コンピューティング研究グループは会員数110名(12月現在)で, 本年度は5回の研究会と4号の機関誌(OPCOM NEWS)を発行した。第85回研究会は, 2月12日に大阪大学で開催し, 参加者数は43名であった。第86回研究会は, 5月17日に東大で開催し, 参加者数は57名であった。第87回研究会は, 7月11~13日に健保長岡で合宿形式で開催し, 参加者数は38名であった。第88回研究会は, 10月22日にクリエート浜松で開催し, 参加者数は20名であった。第89回研究会は, 12月9日に東工大で開催し, 参加者数は45名であった。

#### (8) 光設計研究グループ (Optics Design Group)

本年度は研究会、シンポジウム等の企画、光設計賞の授与と会誌の発行を行った。第17回研究会「レーザーを用いた光学系」(2月12日, 東大生研, 94名)。第46回応用物理学関係連合講演会シンポジウム「光設計の新しい展開を求めて」の企画(3月30日, 東京理科大, 約130名)。第18回研究会「光学薄膜—基礎から最新の成膜・応用技術まで—」(5月27日, 東海大, 123名)。第2回光設計賞(授賞式: 11月24日, Optics Japan '99会場にて)。会誌発行:「OPTICS DESIGN」No. 17-19。

#### (9) 微小光学研究グループ (Group of Microoptics)

平成11年度は4回の微小光学研究会を開催し、その予稿集としてMicrooptics News Vol. 17, No. 1~4を発行した。また、7月に7th Microoptics Conference (MOC '99)を開催した。各研究会およびMOC '99の概要は以下のとおり。

第71回研究会(3月4日, フジクラ本社, 「超精密加工技術が支える回折光学デバイスの新展開」, 101名)

第72回研究会(5月12日, 東大生研, 「環境光学」, 46名)

第73回研究会/第4回集積光デバイス技術・合同研究会(9月30日, 阪大コンベンションセンター, 「光集積デバイスの光メモリへの応用の新展開」, 82名)

第74回研究会(12月3日, 国立天文台, 「極限光学技術—遠くを見る, 極限に迫る—」, 44名)

MOC '99(7月14日~16日, 幕張メッセ国際会議場, 8th International POF Conference と同時開催, 211名)

#### (10) ホログラフィックディスプレイ研究グループ (Holographic Display Artists and Engineers Club)

研究会として、第1回(5月28日, ソニー(株))、第2回(8月27日, 湘南工科大)、第3回(11月25日, 阪大, 共催: 応用光学懇談会)、第4回(3月17日, 日大理工)、アニュアル展示会(第4回研究会と併催)、一般向けのホログラム作成講習会を開催した。また、研究会会報(HODIC Circular)を5, 8, 11, 3月に発行した。その他に、Optics Japan '99シンポジウムテーマの提案、3次元画像コンファレンスの協賛、HODIC 鈴木・岡田賞の選考および贈呈、海外のホログラフィー研究グループとの交流等の活動を行った。

## 4. 会 計

予算担当会計幹事 栗木 一郎

平成11年度の決算状況を、予算と対比して報告いたします。平成11年度の予算は、平成9年度に行った印刷経費全体の見直しを全面的に盛り込んだ形で組まれました。

会誌「光学」では、収支予算に対し、収支決算は約500万円の差(黒字)が生じています。これは12か月分の予算に対し、平成11年末時点で4か月分の未請求が発生したためで、実質的な黒字は決算額より500万円低い額となります。次年度以降は請求が定期的に行われるように求めてまいりたいと考えています。各号の収支はほぼ予算通り行われております。

また会誌「OPTICAL REVIEW」では、ほぼ予算通りに収支決算が行われました。印刷製本にかかっている費用は約580万円であり、支出は飛躍的に軽減されています。

光学シンポジウム、冬期講習会など、研究会や講習会などの事業は本年度も順調で収支も良好でありました。また、初めての試みであったSPIEと共催の国際会議ICOSN '99も順調に行われ、収支は良好でありました。Optics Japanにつきましては、本年度は開催時期を11月末としたため、年度内の決算に間に合わず、平成11年度の決算には計上されておりませんが、収支は良好でした。この収支は次年度の決算に組み込まれることとなります。また、本年度のサマーセミナーは応用物理学会の分科会補助をうけて開催され、場所を軽井沢に変えて多くの学生参加者を迎えて活発な議論が行われました。

会費収入につきましては、予算と決算との間で約200万円の差が生じておりますが、これは予算時点で本年度から導入された特別会員制に則した立案ができなかったためであると思われます。来年度の予算からは会員制度の変更に則した予算立案が行われており、今後修正が図られるものと思われます。

全体としては、約1,400万円の黒字を計上しておりますが、「光学」の清算が順調に行われたといたしますとほぼ予算通り、約900万円の黒字となります。

平成12年度予算におきましては、会誌「光学」のカラーページの予算化が実現されました。また、光学会資料室を設置するための予算も計上されました。光学会の事業活動の企画立案がさらに充実したものとなり、会員各位に対するサービスの向上が図られることが期待されます。会員各位の一層のご支援をよろしくお願いいたします。



平成 11 年度事業報告/平成 12 年度事業計画

	平成 11 年度事業報告(平成 11 年 1 月 1 日～12 月 31 日)	平成 12 年度事業計画(平成 12 年 1 月 1 日～12 月 31 日)
1. 会誌の発行	「光学」 Vol. 28, No. 1～12	「光学」 Vol. 29, No. 1～12
2. 欧文誌の発行	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 6, No. 1～6	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 7, No. 1～6
3. その他	会員名簿の発行	
4. 光学論文賞, 日本光学会奨励賞の受賞	光学論文賞 ・市村 厚一 (東芝研究開発センター) ・小野寺理文 (職業能力開発総合大学校電子工学科) 日本光学会奨励賞 ・藤 貴夫 (東京大学理学系研究科) ・溝上 陽子 (立命館大学理工学部)	光学論文賞  日本光学会奨励賞
5. 講演会, 講習会	第 25 回冬期講習会「光工学における多波長活用技術－光源からシステムまで－」 1 月 12～13 日 40 名 ICOSN '99 6 月 16～18 日 123 件 194 名 第 24 回光学シンポジウム「光学系および光学素子の設計, 製作, 評価を中心にして」 7 月 1～2 日 28 件 305 名 第 32 回光学五学会関西支部連合講演会 7 月 15 日 47 名 第 33 回サマーセミナー「新しい視点と画像の世界」 9 月 16～18 日 42 名 Optics Japan '99 (大阪, 大阪大学) 11 月 23～25 日 209 件 480 名 カラーフォーラム Japan '99 11 月 9～11 日 48 件 212 名 平成 11 年度関西講演会「青色発光素子の現状とその応用」 12 月 9 日 45 名 平成 11 年度名古屋講演会「光計測技術の進展」 12 月 10 日 43 名	第 26 回冬期講習会「超短パルス光学」 1 月 17～18 日 90 名 第 33 回光学五学会関西支部連合講演会 5 月 26 日 第 25 回光学シンポジウム「光学システムおよび光学素子の設計, 製作, 評価を中心として」 6 月 22～23 日 3 次元画像コンファレンス 2000 7 月 5～6 日 第 34 回サマーセミナー「世の中を変える光技術」 8 月 24～26 日 Optics Japan 2000 (北海道, 北見工大) 10 月 7～8 日 カラーフォーラム Japan 2000 11 月 平成 12 年度関西講演会 11 月 平成 12 年度名古屋講演会 12 月
6. 研究グループ	イメージサイエンス, 位相共役・光波ミキシング, コンテンポラリーオプティックス, 近接場光学, 視覚, 光コンピューティング, 光設計, 生体医用光学, ホログラフィックディスプレイ, 微小光学	イメージサイエンス, 位相共役・光波ミキシング, コンテンポラリーオプティックス, 近接場光学, 視覚, 光コンピューティング, 光設計, 生体医用光学, ホログラフィックディスプレイ, 微小光学
7. 幹事会, 委員会	幹事会 3 回 常任幹事会 3 回 「光学」編集委員会 6 回 光科学及び光技術調査委員会 5 回 光科学及び光技術調査委員会 (関西) 3 回 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 1 回 「OPTICAL REVIEW」出版委員会 2 回	幹事会 3 回 常任幹事会 3 回 「光学」編集委員会 6 回 光科学及び光技術調査委員会 5 回 光科学及び光技術調査委員会 (関西) 3 回 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 1 回 「OPTICAL REVIEW」出版委員会 2 回
8. 会員数	平成 11 年 12 月末日現在 (( )内は昨年度) A 会員 764 名 (784 名) B 会員 1170 名 (1170 名) 特別会員 290 口 (220 口) 賛助会員 85 社 145 口 (83 社 143 口)	

平成 11 年度収支決算

平成 11 年 1 月 1 日～12 月 31 日

<収入の部>

大科目	中科目	金額	内 容 (金額記入)
会費収入		24,247,100	
	会費収入	24,247,100	
事業収入		15,598,089	
	講習会, 講演会収入	3,648,583	サマーセミナー 1,097,6000/冬期講習会 611,000/Optics Japan 50,283/その他 (光学シンポジウム) 1,889,700/国際会議 (ICOSN '99) 0
	会誌出版事業収入 「光 学」	8,577,250	別刷代収入 2,199,250/広告料収入 6,300,000/懇親会費 78,000
	会誌出版事業収入 「OPTICAL REVIEW」	3,372,256	別刷代収入 3,039,006/購読料 333,250/科研費補助金収入 0
	その他事業収入	0	一般会計寄付金
雑収入		301,182	
	受取利息	33,272	
	雑収入	267,910	バックナンバー, 資料コピー代
引当金戻入		178,170	
	回収不能引当金戻入	178,170	
繰入金収入		13,395,483	
	分科会賛助会費還元金	4,544,000	40,000×80%×142 口
	分科会給与補助	8,851,483	学会担当者分
当期収入合計		53,720,024	
前記繰越収支差額		47,863,322	
収入合計		101,583,346	

<支出の部>

大科目	中科目	金額	内 容 (金額記入)
講習会, 講演会事業費		3,419,514	
	臨時雇賃金	335,337	サマーセミナー 28,000/冬期講習会 32,000/Optics Japan 0/その他 (光学シンポジウム) 32,000/ICOSN '99 243,337
	印刷製本費	780,423	サマーセミナー 147,472/冬期講習会 167,865/Optics Japan 0 /その他 (光学シンポジウム) 251,936/ICOSN '99 213,150
	諸経費	2,303,754	会議費 33,792/134,438/0/230,703/26,982, 旅費交通費 616,600/0/0/11,820/34,780, 通信運搬費 11,893/13,720/0/188,607/45,640, 消耗品費 0/7,225/0/0/46,152, 賃借料 0/0/0/27,500/0, 諸謝金 402,219/284,818/0/158,909/0, 雑費 15,420/525/0/4,392/1,889, 懇親会費 0/0/0/0/0, 封筒代 0/0/0/5,760/0
会誌出版事業「光 学」		12,391,825	
	印刷製本費	5,168,983	組版代 1,660,680/製版代 702,973/刷版代 408,156/印刷代 795,900/製本代 367,920/別刷印刷代 148,932/用紙代 1,024,822/一般印刷製本費 59,600/広告印刷費 0
	郵送費	2,258,450	
	諸経費	4,964,392	会議費 272,744/編集委旅費交通費 1,428,980/その他旅費交通費 193,080/通信運搬費 276,533/消耗品費 54,500/賃借料 57,620/臨時雇賃金 0/業務委託費 2,660,000/諸謝金 0/雑費 20,935
会誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		8,357,585	
	印刷製本費	4,611,149	組版代 2,048,025/製版代 376,478/刷版代 236,775/印刷代 389,550/製本代 385,433/別刷印刷代 475,995/用紙代 698,893/一般印刷製本費 0/広告印刷費 0
	郵送費	1,575,020	
	諸経費	2,171,416	会議費 30,000/その他旅費交通費 0/通信運搬費 198,076/消耗品費 37,550/賃借料 0/臨時雇賃金 0/業務委託費 1,600,640/諸謝金 0/雑費 0/英文校閲料 305,150/ホームページ作成費 0
その他事業費		1,310,194	
	助成金支出	350,000	
	補助金支出	0	
	名簿作成費	960,116	
	諸経費	78	一般印刷製本費 78/その他旅費交通費 0/賃借料 0/通信運搬費 0/会議費 0/雑費 0
管理費 (含 幹事会)		12,007,790	
	給与手当	8,851,483	学会担当者負担
	一般印刷製本費	24,491	諸印刷代, 資料コピー代
	ホームページ製作費	590,625	
	諸経費	1,720,691	臨時雇賃金 0/会議費 219,183/その他旅費交通費 631,977/消耗品費 33,140/賃借料 91,440/通信運搬費 277,365/諸謝金 0/雑費 145,344/租税公課 304,162/振替手数料 14,480/製本代 0/封筒代 3,600
	回収不能引当金	820,500	
繰入金支出		2,082,040	(他会計への支出額)
	学会事務費	2,082,040	事務手数料
予備費		0	
当期支出合計		39,568,948	
当期収支差額		14,151,076	
次期繰越収支差額		62,014,398	

平成 12 年度収支予算

〈収入の部〉		平成 12 年 1 月 1 日～12 月 31 日	
大 科 目	中 科 目	金 額	内 容 (金額記入)
会 費 収 入		23,108,000	
	会 費 収 入	23,108,000	A, B 会員 1800 名×9600, 学生会員 63 名×6000, 特別会員 A 150 社×15000, 特別会員 B 100 社×30000, 特別会員 C 5 社×40000
事 業 収 入		24,643,000	
	講習会, 講演会収入	7,449,000	サマーセミナー 2,507,000, 冬期講習会 1,330,000, Optics Japan 2,425,000, 光学シンポジウム 1,187,000, 国際学会 0
	会誌出版事業収入 「光 学」	8,500,000	別刷代収入 2,500,000, 広告料収入 6,000,000
	会誌出版事業収入 「OPTICAL REVIEW」	8,694,000	投稿料収入 6,480,000, 別刷代収入 864,000, 科研費 1,350,000
	その 他 事 業 収 入	0	一般会計寄付金
雑 収 入		373,000	
	受 取 利 息	73,000	
	雑 収 入	300,000	バックナンバー, 資料コピー代
引 当 金 戻 入		0	
	回 収 不 能 引 当 金 戻 入	0	
繰 入 金 収 入		13,930,000	
	分科会賛助会費還元金	4,704,000	40,000×80%×147 口
	分科会 給 与 補 助	9,226,000	学会担当者分
当 期 収 入 合 計		62,054,000	
前 記 繰 越 収 支 差 額		47,929,000	
収 入 合 計		109,983,000	

〈支出の部〉			
大 科 目	中 科 目	金 額	内 容 (金額記入)
講習会, 講演会事業費		6,039,000	
	臨 時 雇 賃 金	740,000	サマーセミナー 50,000, 冬期講習会 28,000, Optics Japan 630,000, 光学シンポジウム 32,000, 国際学会 0, その他 0
	印 刷 製 本 費	1,400,000	サマーセミナー 370,000, 冬期講習会 230,000, Optics Japan 500,000, 光学シンポジウム 300,000, 国際学会 0, その他 0
	諸 経 費	3,899,000	会議費 100,000/92,000/560,000/230,000/0/0, 旅費交通費 702,000/50,000/90,000/15,000/0/0, 通信運搬費 60,000/20,000/100,000/50,000/0/0, 消耗品費 10,000/6,000/100,000/10,000/0/0, 賃借料 0/0/90,000/0/0/0, 諸謝金 550,000/527,000/40,000/175,000/0/160,000, 雑費 1,000/1,000/150,000/10,000/0/0
会誌出版事業「光 学」		19,553,000	
	印 刷 製 本 費	9,600,000	
	発 送 通 信 費	2,822,000	
	諸 経 費	7,131,000	会議費 90,000, 旅費交通費 1,070,000, 通信運搬費 300,000, 消耗品費 50,000, 賃借料 78,000, 編集委託費 4,560,000, 諸謝金 933,200, 雑費 50,000
会誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		9,673,000	
	印 刷 製 本 費	5,400,000	
	発 送 通 信 費	1,472,000	
	諸 経 費	2,801,000	会議費 70,000, 旅費交通費 150,000, 通信運搬費 221,000, 消耗品費 0, 臨時雇賃金 0, 賃借料 40,000, 編集委託費 2,280,000, 雑費 0, 英文校閲料 40,000
その 他 事 業 費		1,610,000	
	助 成 金 支 出	1,610,000	関係先補助金等, 研究グループ
管理費 (含 幹事会)		19,396,000	
	給 与 手 当	9,226,000	学会担当者負担
	印 刷 製 本 費	150,000	諸印刷代, 資料コピー代
	賃 借 料	50,000	
	諸 経 費	9,220,000	臨時雇賃金 50,000, 会議費 100,000, 旅費交通費 750,000, 消耗品費 100,000, 通信運搬費 350,000, 諸謝金 0, 雑費 200,000, 消費税 220,000, 振替手数料 50,000, ホームページ費 1,000,000, 光学会資料室関連費用 6,400,000
	回 収 不 能 引 当 金	750,000	
繰 入 金 支 出		2,108,000	(他会計への支出額)
	学 会 事 務 費	2,108,000	事務手数料
予 備 費		100,000	
当 期 支 出 合 計		58,479,000	
当 期 収 支 差 額		3,575,000	
次 期 繰 越 収 支 差 額		51,504,000	